

鞍馬二ノ瀬町の中世埋蔵銭

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



出土した埋蔵銭

発見の経緯 1998年1月28日、左京区鞍馬二ノ瀬町にある民家の裏山で石垣の工事中、偶然に多量の銅銭が発見されました。

発見の通報を受けて文化財保護技師らが現場へおもむくと、銭はすでに穴から取り出されて裏山の上に広げられていました。また、穴には石垣が積まれていて埋蔵状況は確認できませんでした。しかし、出土品の中に曲物（木製容器）の底板や、銭穴に縄縄を通して束状にした「縄銭」の痕跡を残すものを見つけることができました。

発見者からの情報と出土品から推測すると、山腹斜面に掘った穴に曲物を置いて銭を入れ、蓋をし

て埋め戻したようです。地表には河原石を3個置いて目印にしていたようで、後で銭を掘り出して使用するつもりだったのでしょう。

その後、1998年11月に発掘調査を行ない、新たに約300枚の銭と少量の土器片が出土しましたが、明確な遺構や他の銭容器は見つかりませんでした。当地は新発見の遺跡として「鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地」と名づけられました。

出土した銭貨 発見した銭の総数は38,462枚で、総重量は146.5kgありました。1987年に京都駅北側の関西電力ビル敷地内から出土した31,415枚を抜いて、京都府下最多（全国では13位）の出



出土地とその周辺

土総数を誇ります。多量の埋蔵銭（備蓄銭）は全国各地で発見されていますが、なかでも北海道函館市志海苔のように37万枚もの銭が見つかった例があります。



調査中の埋蔵銭出土地



現場での確認作業（上）と出土した銭貨（下）



出土銭は整理中ですが、大半は中国からの渡来銭です。今のところ、最古銭は西暦24年の「五銖銭」、最新銭は1265年の「咸淳元寶」で、その他に国産で中世期独特の「島銭」や「模鑄銭（私鑄銭）」なども少量含まれているようです。

また、埋められた時代は、出土した土師器や最新銭の鑄造年代から1340年前後、つまり南北朝初期頃と思われる。模鑄銭の鑄型は平安京跡（京都駅の近く）や堺市・鎌倉市でも見つかっています。

銅銭は銭貨ともいい、1枚を一文銭、1000枚で一貫文と呼びますが、全国の中世埋蔵銭の出土例から、「省百」といって97枚ほどの銭を槽銭にして百文と計算した例が多く、一貫文は970枚前後で流通していたようです。

出土銭の価値を米の価格を基準

にして推定してみましょう。当時の物価はよくわかりませんが、一貫文で米一石（約150kg）が買えたとされます。現在、米10kgの値段が5,000円だとすると、銭1枚が75円に相当し、出土銭38,462枚では288万円余りになります。

中国では、紀元前から金属貨幣が流通しています。我が国で鑄造された貨幣には、今話題の「富本銭」や、皇朝十二銭（奈良時代から平安時代に発行された12種の銭）などがありますが、958年の「乾元大寶」を最後に鑄造が停止されます。のちの江戸時代の1636年に発行された「寛永通寶」まで公鑄されることはなく、代わって12世紀の後半頃から渡来銭が国内で流通しました。

まとめ 多量の銭貨は、当時の政治経済の中心地である京都近郊



曲物の産板 銭の重みで表面に圧痕が残っている（直径約34mm）

で発見されたことから、中世の流通経済を研究する上で、また、二ノ瀬町の歴史を解明するためにも大変貴重な資料です。

発見の通報から発掘調査に至るまで地主や発見者の協力を得、出土銭貨は一括して京都市へ寄付されました。今後は貴重な文化財として展示や研究資料に活用されるでしょう。

（京都市埋蔵文化財調査センター
梶川 敏夫）